A2-2

重症頭部外傷慢性期患者の機能改善と脳 FDG-PET 所見の検討

○内野 福生、岡井 匡彦、岡 信男、小瀧 勝

千葉療護センター　脳神経外科

【目的】受傷後 6 か月以上経過した重傷頭部外傷慢性期患者（cs-TBI）では、神経症状の改善はあまり望めないとされる。しかし実際は外傷後数年経過後でも機能改善を認める例があることが、これまでの当院の診療経験からわかってきた。Cs-TBI の患者において症状の改善と脳 FDG 集積の変化について検討した。

【方法】68 例の患者（外傷から 6 か月以上経過、17 歳から 64 歳、平均 39±14 歳）において、入院時とその後 22 か月（平均）で 2 回 FDGPET 検査を施行した。機能改善の評価は CHIBA スコアにて行い、機能改善が 5 点未満の「非改善群」（51 例）、改善が 5 点以上の「改善群」（17 例）の 2 群に分類した。　FDGPET の評価は、全脳および視床の集積 SUVavg（集積の peak から 50%領域における SUV 値）にて行った。

【結果】25%（17/68 例）において機能改善を認めた。「非改善群」であっても右視床および全脳の集積は有意に増加した。しかし左視床では増加がなかった。一方、「改善群」では両側視床および全脳で有意な増加を認めた。

【結論】慢性期重傷頭部外傷でも、入院加療によりある程度の機能改善が期待できる。FDGPET による集積評価は、慢性期重傷頭部外傷患者の機能改善の指標となる可能性がある。